



## ～ 今期のパッションフルーツ栽培を振り返って ～

### (1) 生育概要について

9月～5月における、気温・日照時間はほぼ平年通りに推移しました(図1)。今作期の降水量は4月で平年値より低くなり、水不足が心配されましたが、5月では平年通りとなりました。今作は台風などの発生も少なく、開花時期は例年と同程度であり、収穫期全体を通して果実肥大も良好でした。

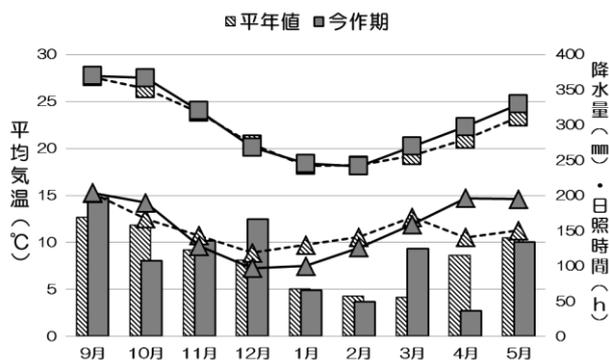


図1 2018年の気象条件および平年値

病害虫による被害は全体的に少なかったものの、枝の芯止まり症状やアザミウマ類による果実被害、キクイムシ等(図2)による収穫調整後の果皮穿孔被害が発生しました。これら被害への対策について、新しい情報が得られ次第、お知らせいたします。



図2 収穫後果皮に食入したキクイムシの一種(左図)、果皮の穿孔被害(右図)

### (2) 次作に向けて

施設栽培が主流となり、パッションフルーツを連作している畑が多く見受けられます。苗の定植までに良好な土壌環境づくりを心がけましょう。土壌診断の実施や、緑肥やたい肥など有機物の積極的な使用、天地返しにより、土壌の物理性や化学性の改善を図りましょう。

### 3) 最後に

今年度は誠に残念ながら品評会が中止となりましたが、生産者皆様のたゆまぬ日々の栽培管理、経営努力に敬意を表するとともに、次年度に向けて益々の栽培技術・生産量の向上が図られることをご期待しています。

＜パッションフルーツ担当:中村＞

### 農業者セミナーのお知らせ

今年度の農業者セミナーは、以下の内容を予定しております。詳細は「村民だより」等でお知らせ致します。

《8月》「マンゴー剪定講習会」 講師:北山朋裕(亜熱帯農業センター)

《9月》「野菜の栽培管理(仮称)」 講師:未定(東京都農林総合研究センター 園芸技術科)

《11月》「病害虫対策(仮称)」 講師:小野 剛(東京都農業振興事務所)

《12月》「レモン剪定講習会」 講師:荒井那由他(亜熱帯農業センター)

## ～ パッションフルーツのアザミウマ類防除について ～

小笠原のパッションフルーツ栽培では、施設栽培による電照利用などの普及に伴い、収穫期の前進化が進んでいます。主な収穫期は3月から6月ですが、収穫後期の6月中旬以降は高温による着色不良果の発生など果実品質の低下が課題となっています。この品質低下の一つにアザミウマ類による被害が挙げられます。この虫害は果実の外観に深刻な被害を及ぼすとともに、葉への被害も確認されています。

### (1) アザミウマ類による被害の様子

アザミウマ類は、多くの野菜や果物に被害を及ぼす害虫であり、日本全国に広く分布しています。小笠原では、ガジュマルクダアザミウマやハナアザミウマなどの生息が確認されています(図1)。



図1 パッションフルーツの花に寄生するガジュマルクダアザミウマ

アザミウマは葉や果実を吸汁し、葉にかすれ症状や果実にコルク化症状を生じさせます(図2)。特に開花後すぐ果実(子房)が加害されると商品価値が著しく低下します。



図2 葉のかすれ症状(左図)  
果実のコルク症状(右図)

### (2) 防除対策について

開花期の薬剤散布が最も効果的ですが、パッションフルーツのアザミウマ類に登録のある薬剤は非常に少ないため、耕種的・物理的防除と組み合わせて行いましょう。

まず、アザミウマ類の発生源となるほ場周辺の雑草防除を心がけましょう。施設の側面への防虫ネットの設置も効果的です。また、早期発見のために施設内に粘着板を設置し、発生初期の防除を行いましょう(図3)。



図3 左：粘着板の設置風景  
右：アザミウマ類の捕殺の様子

その他、アザミウマ類に効果がある物理的防除資材には、UVカットフィルムや赤色防虫ネットなどがあります。これらの資材を上手に組み合わせ、効果的にアザミウマ類を防除しましょう。

### (3) 今後の試験予定

今年度、農業センターでは父島・母島におけるアザミウマ類の発消長調査や赤色LEDを用いたアザミウマ類の防除試験(図4)を行う予定です。試験内容や結果についてはセンターニュース等でお知らせします。



図4 赤色LED試験の様子  
〈パッションフルーツ担当：中村〉

## ～ アフリカマイマイの発生状況と忌避薬剤 ～

### (1) 2018年の発生状況

本年5月に父島および母島の約100地点においてアフリカマイマイの発生状況を調査しました。その結果、母島の発生密度は2016年度の調査時と同程度でしたが、父島では増加が認められました。2016年度の調査においても、増加の傾向がありましたが、本年の調査では集落地の一部地点で著しく多発（2018年度発生密度\*：2.5、2016年度発生密度：0.2）するとともに、20年ほど発生が認められていなかった地点で発生が確認されました（図1）。また、母島においても蔵卵率の上昇が認められたため、今後も警戒が必要であると考えます。（\*1分あたりに採集した生貝数。）

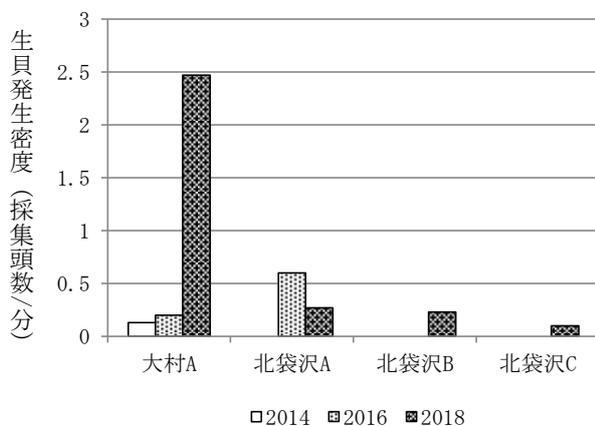


図1 父島において2016年以降に発生密度が増加した地点

### (2) 塩基性硫酸銅水和剤の被害抑制効果

IC ボルドー66D（塩基性硫酸銅水和剤）が2018年3月より、パッションフルーツおよびパパイヤのアフリカマイマイに対して登録適用拡大されました。また、本剤はカンキツ類のカタツムリ類に対しても登録があります。本剤は有機農産物（新JAS規格）への使用が可能であり、収穫前日数や使用回

数の制限がなく、環境にやさしい農薬として使用できます。本剤の被害抑制効果をパッションフルーツとパパイヤの苗で2017年度に試験した結果、食害株率は散布3、9日後ともに0%、一方、無処理区では9日後の食害株率がパッションフルーツで100%、パパイヤで76.7%であり、本剤には高い被害抑制効果が認められました（図2、図3）。パパイヤ苗では薬害は認められず、パッションフルーツでは一部苗でごく軽微な薬害が生じましたが、実用上問題ない程度でした。実用性は高いと考えます。また、薬液痕が長期間残存するため、果実にかからないように注意する必要がありますが、薬液痕が見える間は効果が持続していると考えてよいので、追加散布の時期を逃すことがなく、効率的に使用することが可能です。

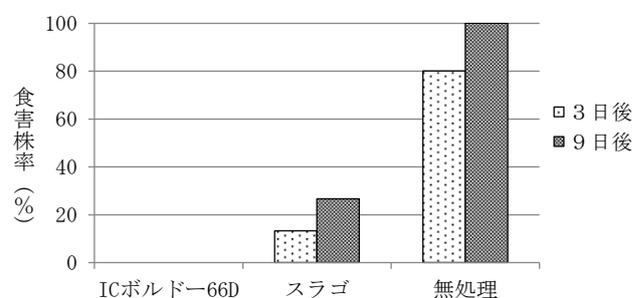


図2 パッションフルーツ苗における被害抑制効果

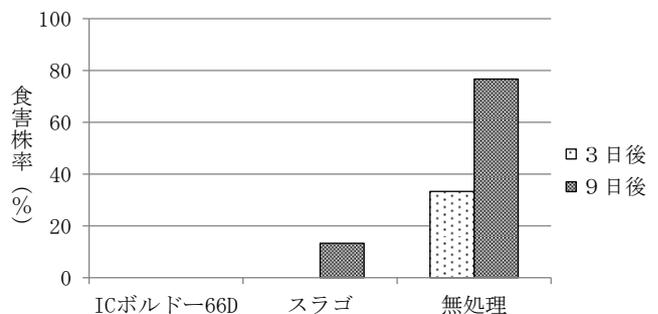


図3 パパイヤ苗における被害抑制効果

<病害虫担当：飯塚>

## ～ ミニトマトの品種比較～

より良い品種を選ぶために例年ミニトマトの品種比較栽培を行っています。

今回は29年9月13日播種、同10月13日定植、各品種69株で実施しました。供試品種は「キャロルスター」（サカタ）、対照として「甘っこ」（丸種）を用いました。以下のような結果を得たので報告します。

### （１）全期間収量

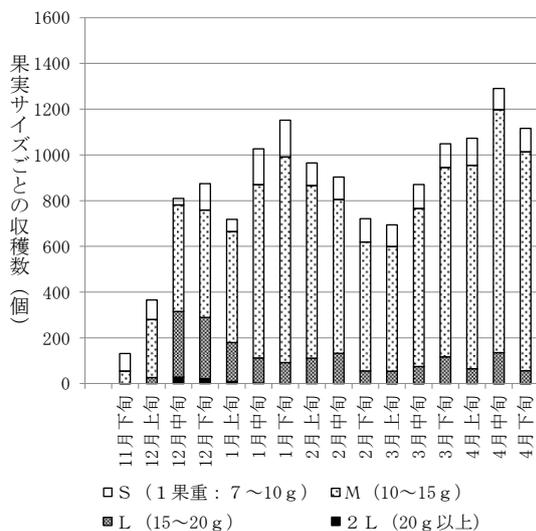
「キャロルスター」は164.8kg、「甘っこ」は150.8kgとなり、「キャロルスター」は「甘っこ」より収量が9.3%増加しました。

### （２）時期別収量

両品種とも収穫開始は11月30日であり、収量のピークは4月中旬となりました。「キャロルスター」は、「甘っこ」に比べて12月上旬～1月下旬での収量が多く、L（15～20g）、2L（20g以上）のサイズも多くなりました（図1）。

### （３）果実のサイズ別収量

「キャロルスター」は全収量中、Lと2Lサイズが11.5%（重量比）、Mサイズが76.7%、「甘っこ」はLが8.2%、Mが81.2%



であり、「キャロルスター」はやや大玉となる傾向が認められました（図1）。

### （４）糖度

全期間の平均値は「キャロルスター」9.6度、「甘っこ」9.9度でした。12月下旬～3月下旬の低温期は、両品種とも同程度でしたが、その前後の温暖な期間は「甘っこ」の糖度が高くなりました（データ省略）。

### （５）割れ果

全収量における割れ果の比率は「キャロルスター」13.1%、「甘っこ」20.4%でした（いずれも果数比）。「甘っこ」は特に1月中・下旬に多くなりました（図2）。

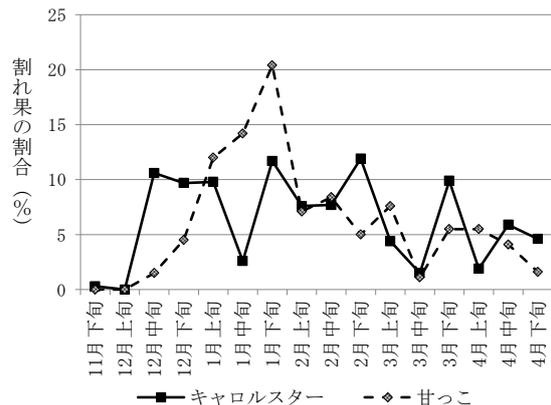


図2 割れ果の割合（割れ果数/収穫数×100）

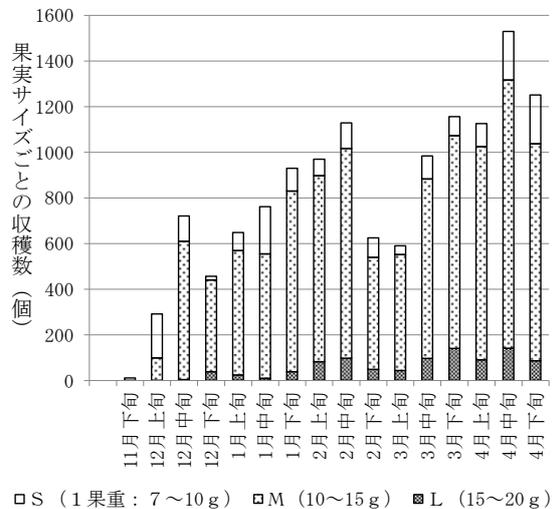


図1 果実サイズごとの収穫数推移（左図：キャロルスター、右図：甘っこ）

＜営農研修所：藤本＞